

「太陽の夜」プロット

干からびた西瓜を、私はまだ口に運ぶことができない。

甘いべとつきが鼻先を這う。

私の指先に食い込んだ朱色の果汁。

夏が、誠実に流れる。

夏だ。

これは夏のお話だ。

14歳。

成長と哀しみとおかしさに溢れた、私の夏のお話だ。

寂れた港町、海藻の山、フナムシの踊り場。

私が住むのは、そんな都会とは正反対に位置付けする町。

人口は約8000人。高齢化が進み、この町に若者の姿は珍しい。

中学生。

「勉強よりも大事なことがある」と、世間は思春期をうまく表現する。

いい年こいた大人が必死こいて子供の味方をする。

「僕は君たちのことを何でも知っている」

いやらしく笑うあの口元。

共存を望んだノスタルジーは、正直鳥肌がたつくらい気持ちが悪い。

両親はもちろん、親戚も、もっといえば祖父母だって、そういう匂いが時々する。

中学生という肩書きは、はっきり言って邪魔だ。

そんな大人たちばかりだ、この町は。

耳をすませば聞こえる波音も、遠くで聞こえる豆腐屋のラッパの音も

威勢のいい港の声も、海を飛び跳ねる魚たちのサーカスも、風が揺らす潮の気配も、

私にとってはどうでもいい日常だ。

夏休みが始まった

夏は、いつもなんでもない時間に特別な意味をつける。

滴る汗や、べたつく素肌すらも、いちいち美しくするのが、夏だ。

隣町では、盆踊り大会が催され、さらにその奥の町では毎年盛大な花火大会がある。

きっと今年もたくさんの男女が、この夏に意味を見出すのだろう。

さあ、山下聖子の話をしよう。

黒く艶やかな髪の毛、港町に順応したかのように強かに焼いた肌。

すらっと背筋を伸ばして歩く背中ライン、金色のアンクレットが上品に光る右足。

「都会から来た」そんな言葉がとても似合う美しい人だ。

日課である早朝のランニングの最中。海岸にその姿を偶然見つけた。

この町に似付かないその佇まいは、外国の絵画に映る日の丸のように異様だった。

「変な女の人がいた」

汗を拭きながら私は母に伝えたと、驚く様子もなく

「ああ、山下さんでしょ」と返した。

朝食の準備をしながら母は、その「山下さん」の話をしてくれた。

東京から来た大学生。

二学期から私の中学校で、教育実習をする。

父が営むアパートに最近部屋を借りた。

あっさりと正体がわかってしまうのも、この町ならではだ。

よそ者は根こそぎ洗い出され、受け入れるか、受け入れないか、ジャッジを下される。

昨年末に東京からセカンドライフを謳歌しようと、この町にやってきた老夫婦がいた。

ロレックス、ベンツ、仕立てのいいスーツ、海岸沿いに建てられたガラス張りの家。

醸し出す高貴な雰囲気は、町民の羨望の的だった。

しかし、その羨望はやがて悪意に変わり、一年もしないうちに家は売りに出された。

そう、あの老夫婦はジャッジの結果「不合格」だったのだ。

「山下さん」はどうだろうか。

父の営むアパートは築40年近く経っていて、とてもお洒落とは言えない学生用アパートだ。

その点はおそらく合格だろう。

あの身なりだけが問題だ。この町には美しすぎる。そして上品過ぎてしまう。

ここは徹底した排除の町だ。大丈夫なのだろうか。

早朝の町。

海が起きる前の静けさ。港の光が黄色く揺れる。

船に張り付いた帆が、天気を教えてくれる。

南東に揺れたら、晴れ。北西に揺れたら、雨。

私の声が、潮風に消されないように。

私の存在が、波にさらわれないように。

それから私は、早朝のランニングのたびに「山下さん」を探した。

海岸沿い、裏道、バス停、町で唯一のスーパー。

私のランニングはあの日を境に、日替わりでコースを変えていった。

そんなある日ー。